

通常の学級における発達の遅れや偏りのある生徒の理解と支援

1 研究の目的

発達障がいについて正しい知識を身につけ、困り感を抱えている生徒の認知特性に配慮した授業をすることで、学習意欲の向上を図る。

2 研究方法

- (1) 発達障がいに対する理解（文献、講座聴講）
- (2) 認知特性の把握（アセスメント）
 - ・ WISC - III 知能検査、新学力知能検査の研究
- (3) 認知特性に配慮した授業実践
 - ・ 授業参観、聞き取り
 - ・ 知能検査の活用

3 研究の実際

困り感が表出している発達障がいがある生徒に対し、認知特性に配慮した授業実践を行い、学習意欲の向上を図ることができたかを検証した。

(1) 第 1 回授業実践 (H22. 11. 10)

① 対象生徒（生徒 A）の実態

- ア 授業参観・聞き取り
- ・ 教員の指示が通らない ・ 授業に集中しない
 - …集中、短期記憶に困難さがある
 - ・ 板書の書き取りに時間がかかる
 - …書字が苦手

イ 知能検査の結果 WISC-III（小 4 時実施）

下位検査の内容	認知の特性	予想される学習面の課題
算数・数唱の低下	短期記憶が苦手	集中することが苦手
符号・組合せの低下	形の構成が苦手	文字の構成が苦手

② 認知特性に配慮した支援

以上の実態をふまえ、困難さがある「集中を持続すること」と「書字」に対し、以下の支援を行った。

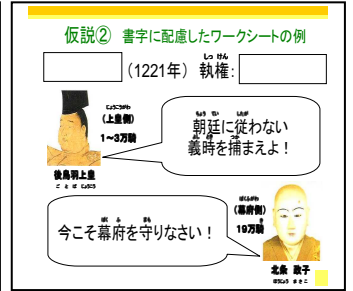
〔集中の持続〕→視覚的提示物を利用する（図 1）

〔書字〕→ワークシートで書字の量を減らす（図 2）

図 1 視覚的提示物の例



図 2 書字の量を減らしたワークシートの例



③ 支援の効果

検証はビデオ、ワークシート、アンケートの 3 種類の方法で行った。

検証方法	検証結果
ビデオで顔を上げる時間を計測	<ul style="list-style-type: none"> ・ 図 3 のように聴覚からの活動では、集中が続きにくかった（図 3） ・ 電子黒板での視覚的教材を提示したので、集中することができた（図 4）
ワークシートへの記入への割合	<ul style="list-style-type: none"> ・ 必要な語句をすべて記入できた（記入率 100%）
アンケート	<ul style="list-style-type: none"> ・ 電子黒板の質問「そう思う」、ワークシートの質問「よい」の回答。本人は満足している。

図 3 集中できなかった活動

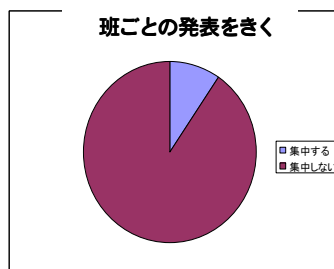
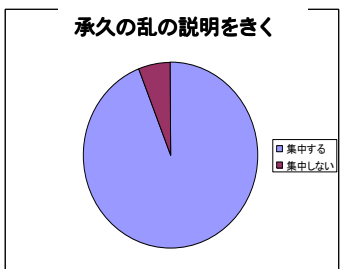


図 4 集中できた活動



④ 考察

- ・ 視覚的提示物が集中の「気を散らすものに抵抗する」支援に有効だった
- ・ ワークシートが書字の支援に有効だった
- ・ 得意な教科、褒められたことで意欲が高まり、集中の「注意の持続」へつながった

図 5 生徒 A のアンケート

授業後アンケート
あてはまるものに○をつけてください。

- ・ 授業のねらいがあり、今日のポイントがわかりやすかった。 (そう思う) ふつう・思わない
- ・ 授業の流れがあり、今日の学習内容がわかりやすかった。 (そう思う) ふつう・思わない
- ・ ワークシートに書く文字の量はちょうどよい。 (多い) (少ない)
- ・ 先生の話は聞きやすかった。 (そう思う) ふつう・思わない
- ・ 電子黒板を利用した授業はわかりやすかった。 (そう思う) ふつう・思わない
- ・ 文字にふりがながあってあり、わかりやすかった。 (思う) ふつう・思わない
- ・ 授業に集中して取り組めた。 (そう思う) ふつう・思わない
- ・ 今日の学習の内容が理解できた。 (そう思う) ふつう・思わない

〈第2回目の授業の課題〉

WISC-Ⅲのような個別検査がない生徒に対し、新学年別知能検査で認知特性の実態把握をし、その中の思考力への支援が必要な生徒への授業を行い、支援の効果を検証する。

(1) 第2回授業実践 (H23. 1. 14)

① 対象生徒 (生徒B) の授業中の実態

- ア 授業観察・聞き取り
- ・教師の発問 (一問一答) によく反応する
 - ・班活動に積極的に参加する
 - ・「なぜ」という発問への解答が苦手

イ 「新学年別知能検査」から分かる実態 (下図)

検査内容	予想される認知の特性
意味的・集中思考の低さ	言葉を介した論理的思考力が苦手
記憶が低い	考えるために必要な情報が覚えにくい
評価が低い	選択・比較・判断することが苦手
柔軟性が低い	違った観点で物事を考えることが苦手

まとめると—

- ・論理的に筋道を立てて考えることが苦手
- ・記憶力、判断力、柔軟に考えることが困難

② 認知特性に配慮した支援

対象生徒へのアセスメントをふまえ、最も苦手とする「筋道を立てて考えられること」を目標として、その力を支える「記憶」、「評価」、「柔軟性」への支援を行った。

①記憶力の弱さへの支援 →視覚的な教材の使用 (電子黒板の利用)	—図6
②判断力の弱さへ支援 →選択肢の設定 (口頭やワークシートで発問)	—図7
③柔軟な思考の弱さへの支援 →身近な例を挙げる。班で話し合う場面を設定する	—図8

図6 「記憶」の苦手さへの支援例

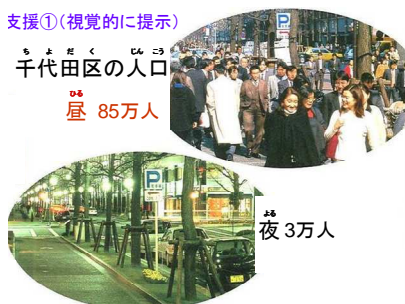


図7 「判断力」の苦手さへの支援例

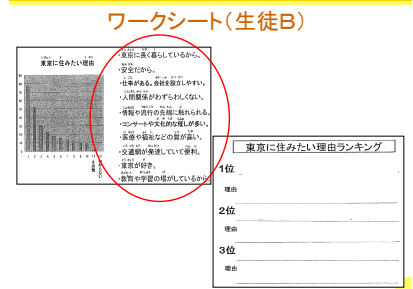


図8 「柔軟な思考」の苦手さへの支援例

ア：生徒の通学の例を用いて、千代田区外から 80 万人以上の方が通勤してくることをイメージする
 イ：1㎡を紙を使い、千代田区の平均地価が約 150 万円であることを提示する
 ↓
 ウ：千代田区の昼と夜の人口差がある原因を考える

③ 支援の効果

検証は発問に対する反応、ワークシート、班活動の様子の3種類の方法で行った。検証結果を以下に示す。

支援方法	検証結果
身近な例を挙げる	・「千代田区の昼と夜の人口の差があるのはなぜか」を問う発問に対し、挙手をして発表した
選択肢の設定	・選択肢を選ぶ問題は記入できた
班活動の場面を設定する	・班の仲間の意見に耳を傾けつつ、自分の意見を主張できた

④ 考察

生徒Bの認知特性に合わせ、
 ・視覚的教材を用いた
 ・選択肢を設定した
 ・身近な例を挙げたり、班での話し合いを取り入れるなど、イメージを具体化した
 この3点の支援が、生徒Bが苦手とする「筋道を立てて考えること」に有効に働いたと考えられる。

4 研究の成果と今後の課題

(1) 成果

- ・様々な情報処理をしようとしている子どもたちの姿を、とらえることができるようになった
- ・認知の特性に合わせた支援は有効である

(2) 課題

- ・生徒の実態把握をより深めること
- ・認知特性をふまえた教材の開発や授業力の向上に努めること